ふたり。

沙夜菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふたり。

【Ｎコード】
Ｎ９７８０Ｍ

【作者名】
沙夜菜

【あらすじ】
学校一とっつきにくいと言われていた少女、柚稀がアメリカ留学から帰ってきた学校一のモテ男子、龍槻に告白される。
周りの反感をかいながらも２人の道を行く男女の物語です＾＾＊

第1章（前書き）

恋愛小説はこの作品が初めてなので、失敗もある、、、かもしれませんがよろしくお願いします。　こんなグダグダな小説作者でも、一応小説作り歴は5年目なので・・・・・w

なお、「これはおかしい」などと思った場合、お気軽にコメしてくださいw↑

第1章

目、目、目――――
学校中の目が、こっちを見ている。
あたりまえだと思った。なぜって、学校一のモテ男、龍槻が学校一の冷たい目を持ち、無愛想な私の手を引いて歩いているのだから。
『柚稀。付き合って』
そう言われたあの日を、いまも鮮明に思い出せる。
きっと死ぬ時も、思い出せる。
『なんで。』
小さいころから親に嘆かれてきた冷たい声で、私は聞き返した。
龍槻は私の目を見て言う。
『お前がいいから。他に理由なんて、ない。』
私の目を見て話した奴は、こいつが初めてだと思った。
誰もが、私の冷たい声を聞くとひるみ、私の目を見たら視線をそらした。
『私の何がいいの？もっと明るい奴とか、いっぱいいるじゃん。』
私の問いかけに、龍槻は笑って答えた。
『そういう奴、うざったい』
そういって続ける。
『自分の意見も持たずに、人とか雑誌に惑わされて大して好きでもない物を買ってみたり、人が言ったことに反論もせずうんうん頷いてる奴が大っきらいだから』
そして言った。お前、俺のこと何か思ったことないでしょ。
周りが俺のこといいとか言っても、特に何も思ってなかったでしょ。
私は頷いた。
――――意外だった。こいつこそが、今龍槻が言ったことに当てはまる奴だと思っていたからだ。
気付かないうちに、私は首を縦に振っていた。

こうして、私と龍槻の道は始まった――――――――――

第2章

「――誰の許可をもらって龍槻といるの？」
そいつ――といっても先輩なのだが――は言った。
私は少し考えた。
許可？特に誰の許可もない。ただ、告ってきたのは、向こう。
私は出した答えをそのまま言った。
すると、里香というらしいその先輩の後ろに控えていた2人のうちの1人が口を開く。
「んなわけないじゃん？龍槻君が、あんたなんかに――」
「龍槻の何を知ってるんですか」
私は言い返す。そんなこと言ったって、私だって付き合いは浅いから龍槻のことを「知っている」わけでもない。
でも、あの時確かに言った。
『自分の意見も持たずに、人とか雑誌に惑わされて大して好きでもない物を買ってみたり、人が言ったことに反論もせずうんうん頷いてる奴が大っきらいだから』

きっとこの後ろに控えている「キューピット」がそうだと思う。
龍槻の事を何とも思ってないか、それとも本当は好きで、でも里香という先輩に協力してしまっているか――。

「私は、あんたなんかよりずっと龍槻君の事思ってきたの。あんたみたいな奴に取られてなるもんですか」
里香は言う。
「それでも、振り向いてもらえなかったんですよね」
私は薄く笑った。先輩相手にこんなこと言うなど、自分でもゾッとする。
ここまでしぶとい奴も珍しい。

さすがに里香はキレて、私をさらに壁に押し付けた。
今は放課後。私は校舎のギザギザの壁に押し付けられている。
　下手したら、セーターに穴があく・・・・・・

たいていの奴らは、私が龍槻と付き合い始めた間もないころは冷たい視線を投げかけたりしてきた。
でも今はもう、そんな奴もいない。
――こいつを除いては。
こいつだけは、しぶとく私を追い詰めていた。

チャイムが鳴る。
チャイムが鳴ると、この学校では先生が学校内を見回っていた。
まだ校内にいる生徒を帰らせるためだ。
当然、里香もこれを知っていたので里香は悔しそうに私を離す。
　私はちゃめっけたっぷりに言った。
「先輩、さようなら」

私はこんな態度をとりながらも、帰り道に考えていた。
私は何故、龍槻といる？
告白されたから？
告白されたから、理由もなく付き合ってるの？
――と、その時携帯が鳴る。
龍槻からだった。
　私は少しためらって、出る。
「ぁ、柚？今からいい」
私はうなずいて、電話だからうなずいても通じないことに気付く。
「ぁ、うん、いいよ」
無理に笑って、言った。

本当に、私はなんで付き合ってんだろ――――。

第3章（前書き）

すいません、これは単に「龍の優しさ」主張したかっただけでｓ（
なので大して山とかはありません↑

第3章

里香の言う事も気にせずに、私は龍と町の雑貨屋にいた。
「これ、欲しいの」
私が眺めていたストラップを手にとって、龍が言う。
「えっ、あぁ、うん」
素直にうなずくと、龍もうなずいて
「買ってやるよ」
と言う。
「いいよ。なんか、悪いし」
と断ろうとしたら、あげかけた私の手をおろしてニッと笑った。
「いいんだよ」
「でも・・・・・・」
なおも言おうとした私を押しとどめて龍は言う。
「俺本人がいいっていうから、いいの」
ここまで来るなら、と私も折れた。
「本当にいいの？」
上目目線で「最終確認」をする。
「いいの」
と龍は言い、レジにそれを持っていき、会計を済ませた。金を払うときに財布が開いて見えたんだけど、そこにはほんの少ししかない。
「本当に大丈夫だったわけ？今、切らしてんじゃないの」
と聞くと、顔を少し赤らめて言う。
「うっ、そんなこと言うな・・・・・・」
その顔に私は吹きだして、ありがたくそのストラップを受け取った。
家路につきながら私は龍に言った。
「龍はさぁ、里香って先輩、どう？」
「嫌い」

即答・・・・・・。
「即答だね」
思ったことをそのまま言うと、龍が顔をしかめる。
「柚に前言った奴って、まさにアレじゃん。つか、軽くアイツを連想して言ったことだし・・・・・・」
「ぇ、そうだったの？」
思わず笑いだしたくなる。
「でもまぁ、そうだよね。というか、しつこいんだよ。たいていの奴らは私たちが付き合いだしたときうるさかったけど、今はなんとか落ち着いてるじゃん？でもアイツだけは未だに放課後毎日毎日・・・・・」
何気ない私の言葉に龍は立ち止った。
「何、どしたの？」
「柚、なんもされてない？」
「へっ？」
思わず気が抜けて聞き返したけど、龍の真剣な表情に立ち止まる。
私の腕を掴んで龍はもう1度言った。
「だから、なんか乱暴なことされてないかって」
「あぁ、全然大丈夫・・・・・・というか、私があんな奴に負けるわけないじゃんよ？」
と鼻で笑ったら、やっと笑って腕を離してくれた。
「そっか。柚、強そうだもんな」
「ぇ、何それ」
とか言いながら歩いていたら、いつしか私の家の前まで来ていた。
「じゃあね。ストラップ、ありがとー」
と言いつつ私は玄関を開けた。というか、開けたつもりだった。――開かない。
いつまでも中に入らない私を見て、龍が顔をしかめた。
「柚、どうしたんだ？」
「開かない・・・・・・」

あわてて時計を見る。
――――7時23分。
「え、もう7時過ぎてるの・・・・・・」
私の言葉に、龍も時計を見た。
「わぁっ・・・・・・俺は、家に誰もいないし大丈夫だけど・・・・・・」
龍の言葉にうなっていたとき、裏から妹の友梨が出てきた。
「お姉ちゃん！何してたのさぁ・・・・・・お母さん、カンカンだよ」
と、龍に気付いて「こんばんは」と言うと、
「いい人つかまえたね」
と私に耳打ちする。
「とりあえず、私の部屋の窓から入れてあげるから」
友梨の言葉にありがたくうなずいて、私は龍にもう一度言った。
「じゃあね。ストラップありがとー」
「明日、学校で」
そう交わして、私はそそくさと、友梨の部屋に入り込んだのだった。

「――――で、何してたって？」
目の前には、――――そう、アニメで言うなら頭から角が生えている鬼――――母さんが仁王立ちになって私を見下ろしていた。友梨は部屋の隅で恐る恐る私を見ている。
「と、友達と雑貨屋さんに・・・・・・」
「こんな時間までよくそんな抜けぬけと遊んでいられたわね？えっ？」
「いや、可愛いのがありすぎて時計見るの忘れてて、外も初夏だから明るかったし、気付かなくて・・・・・・」
先輩に対してはあんな態度をとっていた私も、本気で起こった母さんを前にすると、縮こまってしまう。
ハぁ、とため息をつく母さん。ということは、もうそろそろ説教も

終わりか。
しびれてジンジンになった足をこする。
「次からは、外の状況にかかわらず時計をチェックするのよ。そうしないと、次こそ入れてやらないから」
母さんは言った。そして、友梨、と友梨の方を見る。
「あんたもね、姉ちゃんと仲がいいのはいいけど、そんなすぐすぐ入れたやったら柚が反省しないでしょ」
はぁい、と友梨は言うが、特に本気で受け止めた気配はない。
母さんも分かっているはずだが、だるそうに肩を叩いてごはんにするわよ、と言った。
あぁ、よかった！

第４章ー上（前書き）

これは一つ目の大事件です。。。里香先輩、恐るべしｗ

第4章ー上

・・・・・・また始まった。
いつものように私は、里香達に壁に押し付けられている。
本当に、イライラした。
「あんたは、龍の何？」
と里香が聞いてくる。　またそれか、と私は舌打ちして、後ろの2人を見た。
意味もなく、私を睨んでる。特に何も言わず、何もせず。きっと、里香に反抗していじめられるのが怖いんだと思った。
「何、舌打ちしてんのよ」
「龍は、私の『彼氏』。それ以外に何か？」
私はしっかりと、里香の目の奥を捕えて言った。
それに怒った里香は、後ろの2人に何か合図する。2人が私を抑えつけた。
「な、何！？」
思ったよりその力が強かったことに戸惑って、私は声をあげた。
私の声には答えずに2人は私を古い、今は使われていなくて、その存在すら薄れつつある倉庫に連れて行かれた。
ホコリっぽくて思わずくしゃみが出る。何だか、ガソリン臭いのは・・・・・・気のせいだろうか。
そのまま里香と2人は、私を置いて倉庫から出て行った。
　パチパチ・・・・・・・
この音は・・・・・・・火？
最初は弱かったこの音が、だんだん強くなっていく。気付けば私の周りは、火の海になっていた。
倉庫の中の縄や、新聞、ホコリがあり、木造りだから余計に燃えているのだろう。
その時私は、出口までがキレイに燃えていることに気付いた。　ぁ・

・・・・・きっと、ガソリンだ。
あの臭いは気のせいじゃなかったのだ。
　とにかく煙を吸わないように、口を押さえて周りを見回す。どこかに、出口はないのか。
外からは、里香の甲高い声が聞こえた。
出口、出口――――・・・・・・
ない。どこにもない。窓は積み上げられた段ボールで隠れているし、段ボールも燃えている。
というか、周りがすべて火のために大して動けない。
　煙を吸わないように止めていた息が切れてきた。だからといって息を吸うのもマヌケだと思ったのでそのまま我慢すると、限界が来て、思わず口にあてていた手を離してしまった――――
思わず咳が出る。煙が、口の中に流れ込んだ。あぁ、ダメだ――――

　私はこのまま、意識を失った。

「――――ず・・・・・・柚！」
ぼやけて、龍が見えた。
「・・・・・・・龍」
自分でも驚くほど、声がか細かった。
「柚？」
半泣きの龍の顔に、私は小さく笑った。
「大丈夫」
自分で言って、なんとか起き上がろう・・・・・・とした。
でも起き上がれない。私はそのまま、龍の腕に倒れ込んだ。
　里香たちの姿は、もうなかった。

第4章一下

気付けば病院にいて、友梨が右の端に見えた。
目を覚ました私を見て，声を上げる。
「お姉ちゃん！よかった・・・・・・」
でも、その後ろには火が見える。火、火、火――――
「火・・・・・・」
つぶやいた私を見て、友梨は戸惑っていた。
そして、言う。
「お姉ちゃん、もう病院だから、火なんてない。もう、大丈夫」
友梨の言葉で、火は消えた。安堵の息をついて、首を回す。
「ぁ、お母さんとお父さんはもうすぐ来ると思う。急いで仕事、抜けてくるみたいだし」
友梨が言った。
「そう・・・・・・」
別に、両親のことを思ったわけではなかった。特に何も考えなかった・・・・・・とその時、私は隣に誰か寝ていることに気付いた。
「・・・・・・・龍？」
上半身を起こす。結構簡単に起き上がれた。・・・・・・人間の本能？
「龍！？」
私より火傷がひどかった。
「友梨、これ、どういうこと？」
「・・・・・・・龍槻さんも火傷したの」
言いにくそうに、友梨が言う。
「なんで！？」
だいたいの見当はついていたけど、聞かずにはいられなかった。
「直接聞いたわけじゃないけど・・・・・・多分、お姉ちゃんを助けるために」

「私を・・・・・・助けるため」
つぶやいた私に、友梨がうなずく。
「でも、大丈夫だと思う。お姉ちゃんもそうだし、運ばれてきたのが早くて、治療も出来てるから」
明るい声で友梨は言うけど、私はうなずけなかった。
「でもお姉ちゃん。なんで、あんなことになってたの？」
「先輩にやられた」
今でも、火の中から聞こえた里香の甲高い笑い声が耳にこびりついていた。
「えっ、なんで！？」
「龍が・・・・・・私とは釣り合わないって。最初のうちは、ほとんどがそういう目を向けてきたけどさ、今は大丈夫。なのに、里香だけは毎日毎日、私を校舎の壁に押し付けて、同じ質問してくるの。それでこれが、『シメ』なのかな？私を殺すつもりだったんじゃない」
軽く言ってのけた私を、友梨が困ったような顔で見ていた。
「殺すって・・・・・・そこまでは普通、しないよ」
「でもガソリンの臭いもしたよ？そんなの、殺意満々じゃん」
そのとき、ドアが開いて両親が来た。
「柚！？」
真っ青になっている。
そこで気付いた。さっき私は、「殺すつもりだったんじゃない」と軽く言ってのけたけど、龍がいなかったら死んでたのかもしれない。きっと、多分。
「大丈夫だよ」
何か聞かれる前に、そう答える。
「大丈夫だから」
もう一度、言う。そうでもしないと、何するか分かんないんだから。
　そのとき、龍の母親・・・・・・らしき人が病室に飛び込んできた。

走ってきたんだと思う、肩が上下している。
「龍！龍・・・・・・」
と、龍のベッドに倒れ込む。
「あんたが・・・・・・あんたがやったんでしょ！？」
カッと目を見開いて、私に責めよってくる。
「ちょっと、やめてくださいよ！」
父さんがかばおうとするけど、龍のお母さんは父さんを払いのけて私の肩を揺さぶった。
「龍を！龍を・・・・・・」
そう言って、床に泣き崩れた。　私は謝るにも逆ギレするにも何もできなくて、ただうつむいていた。
　ガラッとドアが開いて、医者が入ってきた。
「お母さん、龍槻さんは大丈夫です」
龍のお母さんをなだめるように言う。
医者の言葉なら信用できるのか、龍のお母さんは立ち上がった。
私がちゃんと起き上れている事と、龍の状態が大丈夫だということを確認すると、医者は
「もうじき意識を取り戻すと思います」
と言い残して、病室から出て行った。
医者の言うとおり、１５分ほど経った頃龍は無事、意識を取り戻す。
でも時間が悪く、面会時間が過ぎようとしていたので私の親、友梨と龍のお母さんは病室から出て行った。

「柚、大丈夫？」
龍が聞く。
「私は、全然。龍こそ大丈夫なの？・・・・・・どうして龍までそんなことになってるの・・・・・・？」
さっき友梨に聞いたし、自分でも検討ぐらいついている。でも、本人の口から聞きたかった。
「バカ・・・・・・なのかな、柚を助けるために、先生も呼ばずに

火の中に飛び込むなんて」
笑いながら、龍は言う。
「全然バカじゃない。ごめんなさい・・・・・・ありがとう。私のせいで、そんなケガ、というより私よりひどい火傷で」
そんなの、と龍が言う。　その時思った。なんで、自分を犠牲にして他人を守ろうと思えるの？
「それより里香だよ」
とふいに龍が顔をしかめる。
「なぁ、あの時、何があった？なんで、あんなことになってた？」
言いたくなかった。だから、困ったように笑うと、真面目な顔でもう一度聞かれた。
「何があった」
そんな顔で言われると言わないといけない気がして、私は恐る恐る切り出した。
　いつものように壁に押し付けられていたこと。いつものような質問に答えると、後ろの2人に押さえつけられて、抵抗しようとしたけど案外力が強かったこと。そしてあの倉庫に連れていかれて、ガソリン臭いと思ったけど、気のせいだと思って無視したこと。すると煙の臭いがしてきて、火があったこと。倉庫の入り口まで、というか私の周りがすべてきっちり燃えていたので、あのガソリンは気のせいじゃなかったということや、煙を吸わないようにしたけど限界で思わず煙を吸い込んでしまい、倒れてしまったこと。
そして一瞬龍の顔が見えたけど、次に気付いたらもう病院にいた、ということ――――
「いつものように」というのに、龍は険しい顔つきになった。
「いつも？」
あ、しまった――――と思ったけど、もう遅い。
「いつものようにって、じゃあずっとされてきたのか！？」
そう、龍には心配かけないようにって、何もされていないと嘘をつき続けていたんだった。

ここでまた嘘をついても面倒になるだけなので、私はしぶしぶ頷いた。
「いつもって、どれぐらい？」
「・・・・・・2日に1回ぐらい」
「・・・・・・」
龍は黙り込む。それほど、ショックを受けてたのかな。
「次から、言えよな」
やっと口を開いて、それから龍はそっぽを向いてしまった。
心配かけないように、と黙っていたけど、余計に心配をかけたのかもしれない・・・・・・
そんなことを考えながら、一夜は過ぎて行った。

次の日、私たちは早くも退院した。
まだ火傷の跡は結構残っていたけど、2人とも普通に元気だったし、何よりもこの狭苦しい病院生活が嫌だった。
なので、「もう退院するか」と医者に言われた時は本当にうれしかった。

第5章

退院してから1日学校を休んで、その次の日。
私と龍は、先生に呼び出されて体育館裏にいた。
5分ほど待っていると、私の担任、龍の担任、里香たちの担任がやってきた。
私は、ほぼ反射的に身構えた。先生が3人もいたら大丈夫だと頭では分かっていたけど、何しろ倉庫を燃やした奴らだ。何をされるか分かったもんじゃない。
それにまだ3人は、こちらを刺すように見つめてきている。
「3人が、2人に謝りたいそうだ」
先生が言う。言うけど、この顔的に本当かは分からない。多分、さっき先生たちに囲まれて、それをさっさと済ませるために言っただけだろう。
里香を先頭に、3人がつかつかと歩み寄ってきた。
「なんで、あんたは龍と付き合ってるの」
・・・・・・「謝る」とは程遠い言葉が飛んできた。でも、よくよく考えてみるとそうだ、なぜ付き合っている。告白されたから？されたから、理由もなく付き合ってるの？
「好きだから」というのも理由の1つかもしれない。でも、私を命がけで助けてくれた龍を、ただ「好き」というだけで付き合っている気も・・・・・・しない。
答えを考えている私を不安に思ったのか、龍がこっちを見た。私も、そのまま龍を見なかったらヒドイ奴になると思うので、龍を見る。
目が合って、答えが見えた。
「目です」
私は答えた。相手が思わず呆れたようにこっちを見てくる。
「何言ってんの？」

「目。今まで、家族以外の人はみんな私から目をそらしてました。
今は、龍のおかげか知らないけどマシになった気がするけど、前は本当に『冷酷』な目で、私と話す時も絶対、私の目は見てくれなかった。でも、龍は違ったんです。」
そこまで言って、私は龍を見た。
「龍だけは、あの日もその前も、ちょっと一言二言話しただけの時でもちゃんと目を見てくれてた。
なんでもないフリしてたけど、本当は、誰かと目を合わせて話したかった・・・・・・から」
そう、告白されたあの日も、ずっと、いつでも龍はしっかり目をとらえてくれた。
龍の瞳にだけは、私が映る。
理由は、それだけで十分だ――――
龍が、嬉しそうな顔をする。
「ありがとう、柚」
そこで、先生も少し混乱してきたようだった。
今回、謝らせるために5人を集めたのに――――
多分、そんな思いが渦巻いているんだと思う。 里香たちも、納得したのかしなかったのか、とりあえずこっちを見た。
「・・・・・・ごめんなさい」
里香がぼそりとつぶやく。
「本当に、ごめんなさい。あそこまで燃えるとは思ってなくて。そこまで、危険な目にあったとは思ってなくて――――」
目には涙まで浮かべている。私と龍は顔を見合わせた。
「私たちも、ごめんなさい」
後ろのキューピット達も言う。
「信じて、いいと思う？」
小声で龍に尋ねる。龍の答えは、首を傾げる――――すなわち、「分からない」だった。
私たちは困って先生たちを見る。先生たちも首をすくめ、これは自

分たちで考えるしかなさそうだった。
「もうこれから、放課後に呼び出したりしませんか」
私は聞いた。
里香たちはうなずく。
「妙な噂流したりもしませんか」
またうなずく。
私は龍に言った。
「だってさ」
「じゃぁ、もういいんじゃね」
龍も言う。多分・・・・・面倒くさくなってんだと思う。
「もう、いいですよ。早く帰りましょ」
私は言って、龍と2人で歩きだした。あっさりしすぎて先生たちも戸惑ったのか、声をかける。
「もう大丈夫なのかーっ？」
何がかと思ったけど、多分火傷のこととか精神的・・・・・なこととかだと思う。
「大丈夫ですーっ！」
声を張り上げて、龍が言う。
「ご心配おかけしましたぁー！」
私も叫んだ。
そして、校門を出て、家路に向かった。
事件、解決。

第6章

「柚ってさ、妹かなんか、兄弟とかいるの」
ふいに、龍槻が口を開く。2人で歩いていた時だ。特に会話もなかったけど、龍の顔がどことなく厳しくてどうしたのかと考えていた矢先に。
「えっ、あ、いるよ。中1の妹が1人」
突然話しかけられて驚いた私は答えた。
「龍は」
「俺は・・・・・・今は、いない」
「今・・・・・・は？」
龍の言う意味が分からなくて、私は聞き返した。
龍が私の目を見て言う。
「今からこのこと言っても、変わらず俺といてくれる？見方が変わって、一気に嫌いになったりしないって、約束できる？」
私はうなずいた。
「俺がまだアメリカにいたころ・・・・・・アメリカって、危険だっていうから、普通の住民でも銃を持ってていいんだ。これは、知ってるよな？」
私がうなずくのを確認して、龍は続ける。
「日本って安全だろ？だから余計に俺たちは不安で、家族で1人ずつ、銃を持ってた。学校にもそうだし、そんな奴はいっぱいいたし、校則的にもｏｋだったんだ。　去年の話で、俺が中3、弟が中1だったから、学校も同じだった。
そのまま、5ヶ月は平和だったんだ。5ヶ月は・・・・・・」
そこで龍は、口を閉ざした。うつむいて、よく見ると目の端に何かきらめくもの・・・・・・あれは、涙か。
私は龍の背中をさすってやった。
「ゆっくりでいいよ？言いたくなったときに、言えばいいんだよ？」

でも龍は、決心したからには今言うらしい。続きをゆっくりと語り始めた。
「5ヶ月は平和だった。アメリカだから田舎っていってもそこまでじゃないんだけど、とりあえず田舎だったし。
でも、俺たちは知らなかった。ここは田舎だからこそ、危険なんだって。そう、都会の方に占領・・・・・的な感じでされそうになってて、市長はそれを渋っていたらしい。だからどっかの兵隊たちの矛先は、俺たちがいた町に向いたんだ。そしてあの日、兵隊たちが町に乗り込んできて、学校にも3人ぐらいやってきて、銃で乱射しはじめたんだ」
ここでまた龍は、口をつぐんだ。
「・・・・・」
私は何も言えなかった。続きは、なんとなく分かる。
「その弾が、弟にあたって、弟は死んだ。俺はとりあえず持ってた銃で、その兵隊を撃ったんだ。別に、殺すつもりなんてなかった。ただ、弟・・・・・・竜哉を殺されたのが悔しくて、撃っただけなんだけど・・・・・・」
また龍はためらった。私をチラリとみて、
「本当に、今まで通りでいてくれる？」
と聞く。私がうなずくとため息をついて続けた。
「竜哉の復讐・・・・・・ってわけじゃないけど、とりあえず撃ったんだ。適当に、当ても狙わず。そしたら兵隊の肺のところにあたって、兵隊は倒れた。周りでは、ほかの子たちも何人か倒れてて、死んでる子もいて、周りは血だらけで・・・・・・兵隊の周りも同じ様に血が溢れていた。その時、気付いたんだ。この兵隊は、俺が殺したんだって・・・・・・」
　そして龍は、しばらく黙っていた。
「それでもいい」
私は龍に言う。
「私は龍がそれでもいいよ？今までだったら、怖いって思ったかも。

そんな奴と一緒になんていられないって、思ったかもしれないけど、でも今は、今の私は優しい龍を知ってるもん。命がけで私を助けてくれたり――そう、だってあの時、龍の方が火傷ひどかったじゃん。別に龍がその兵隊を・・・・・・殺しちゃってても、兵隊は悪い奴だったわけだし、実際龍の弟・・・・・・竜哉君？を殺したのは事実だし」

そこまで言って、私は笑った。

「ここまで来て、嫌いになんかならないよ」

そうして、龍に軽くキスをした。人生初のそれが龍で良かったと思う。

「むしろ、今までよりも好きになったかもしれないよ」

といって、ハンカチで龍の涙を拭く。

「らしくないんだから」

私の言葉に、やっと龍が笑った。

「ありがと、柚」

龍が私に抱きついてくる。

「ここ、道だよ！？」

驚きながらも私は言った。

「さっきここでキスした人には言われたくありませんー」

笑いながら龍が言う。よかった、いつもの龍だ。

つられて私も笑う。

前より一層、絆が深まったような気がして、嬉しい日になった。

第7章

「またかよ・・・・・・」
今日も、私は下駄箱でため息をつくことになった。ここ3日、よく物が消えている。消えているというか、隠れている。といっても案外すぐに見つかるところに置いてあるので、そこまで困っても・・・・・・いない。
でも多分、早く解決しておかないともっと大変なことになると思う。問題の小さい芽は、大きくなる前に摘み取っておかねばなるまい。犯人も、分からないし。里香かとも思った。あいつのことだ、「噂も流してないし放課後呼び出してもいないんだから、約束を破ったことにはならない」などと言ってそう。それなら余計に厄介だ。
　そして今日龍に相談しようとか思っていたら今日に限って風邪で休みだと言う。
「あった・・・・・・」
今回は傘立ての陰に置いてあった。結構ホコリがたまっているところだ。
「あーあ、汚れてるじゃん」
靴についた汚れを掃ってから私は靴をはいた。ゆっくりと家路に向かう。
電車に乗って、家に着いた。親は仕事でいない。
「ぁ、お姉ちゃんおかえりー」
友梨が出迎えてくれる。
「ただいま。今日ってお母さん何時帰りだっけ？」
聞いてみると、分からないという答えが返ってきた。
「それより、私今から友達と買い物行ってくるからお母さん帰ってきたら言っといてね」
と、外へと飛び出ていく。
「いいけどさぁ、前の私みたいに7時過ぎたら怒られるよ」

私の言葉を背中に受けて、友梨は自転車で走って行った。

　さて、何をしようか。今日は特に宿題も出ていないし、試験間近でもなんでもない。

そうだ、龍は大丈夫なのかな。電話してみようかな。でも、どんな程度の風邪かも聞いていないし、喉が痛かったりしたら迷惑だろうな。頭が痛かったら、メールの画面なんか見て大丈夫かな。

・・・・・・連絡手段が断たれた。

でも龍のことだし、大丈夫かな。よし、喉が痛いらしかったらすぐに切ろう。

そう思って、私は携帯を手に取った。

『柚？』

相当早く出た。多分１秒かからなかったと思う。

「うん、柚。風邪大丈夫なの？喉がアレだったら切るけど」

答えは笑い。すなわち、「全然大丈夫」だった。

『大丈夫でも、やっぱ３８度あれば、学校行ったら逆に迷惑だろ？』

「なんだ。心配して損した」

『それはないだろ』

でも、よかった。まだ会話も大してしたことなかった頃でも、龍が休んだという話は聞いたことがなかったから。

そのあとも１０分ぐらい話して、「多分、明日は学校行ける」という言葉に安心して電話を切った。

そして次の日。龍はちゃんと学校に来た。

でも、登校早々掃除当番になって、私が先に帰ることになった。

「あれ」

今日も靴だ。昨日までの４日間は、全部違うものが隠れていたのに。

真っ先に傘立てを見たが、そこじゃなかった。

うろうろと探し回っていたら、後ろから声をかけられた。

「なんか、探してんの」

龍じゃない。オレンジに近いような茶髪で、私の靴を片手に持っていた。
「あ、それ」
思わず私が手を伸ばすと、そのオレンジは――――――私が抵抗する間もなく――――――キス、してきた。
手か足かを出して、こいつの顔面をどうにかしてやりたい。
そう思って力を入れるが、手も抑えられているし足も踏まれていてどうにもならない。
　顔を離してこっちを見たオレンジの顔は、「してやったり」というように笑っていた。
オレンジが手も足も話した瞬間、反射的に足が出た。中1の頃に友梨を泣かせてから封印してきた回し蹴りを、思いっきり食らわせてやる――――そう思った矢先、私は目の端に龍の姿を捉えた。
あげかけた足を下ろして、私は龍がいた方向を見た。どうしよう、結局こいつを蹴れなかったわけだから、龍の目には私が抵抗もしなかったように映ったはずだ。早く誤解を解かないといけない。
オレンジを跳ね除けて、龍を追う。どこ。どこにいる？
龍のお気に入りの場所なんか聞いたことがないし、あいつはいつも教室で友達といるから居場所なんぞ検討もつかない。
「あ、そうだ」
こんな時の携帯である。焦りすぎて、3回も失敗した。やっと成功したとき、聞こえたのは龍の声ではなく機械的な女の声――――
「繋がらない」
きっと、着信拒否だ。どうしよう、家に行くか？でもそんなことしたら、今度こそ本気で嫌われる。
明日どうせ学校で会うんだから、適当に呼びだしてちゃんと説明しよう。
そう決心して、私は再び下駄箱へと戻った。オレンジはもういない。
靴はというと、ちゃんと私のところに入っていた。靴を履いて、家へと帰る。

そうだ、友梨。なんだか知らないけど今までに作った彼氏の数がすごいらしく、中学でもその手相談はたくさん持ちかけられてるとか――――私が龍と付き合い始めた当時、「いつでもいいなよー」と少し馬鹿にしたように言われて、思いっきり跳ね返したんだっけ。自分から跳ね返しておきながら言うのも嫌だけど、でも友梨ならきっと。

友梨に言ってみようという考えがまとまって、私は足を速めて、家に着いた時には息をきらしていた。

第8章

「へぇっ！？」
友梨に言ってみると、ものすごくすっとんきょうな声をあげられた。
「そんなの、家に押しかけでもしたらいいんじゃないの」
それは、私だって考えた。考えた・・・・・・けど。
「なんか、変な人みたいじゃん」
私の反論に、友梨は首を振る。
「ダメだよ。今すぐにでも行かないとさぁ。だって明日だったら、今晩のうちに変な方向に考えられて余計に不利になったりするし」
「変な方向って？」
「だから、龍槻さんだって少しはお姉ちゃんが実は嫌がったんじゃないか、とか考えると思うよ？でも人ってさぁ、いい方に考えようとしてもどうしても悪い方に考えちゃうものじゃない？で、その悪い考えにとらわれて、お姉ちゃんがなんの抵抗もなく受けた、って言う風に決めつけちゃう、と」
確かに、友梨の言うとおりだと思う。
私だって小学校の頃、少し友達に避けられて「偶然」と思おうとしてもなんとなく嫌われたんじゃないかとか不安になってしまっていた。このときの場合は、私の勘違いだったんだけど。
過去の出来事はともかく、とりあえず私は友梨の意見に納得した。
・・・・・・というわけで、龍の家に行くことにした。
今ならまだ、間に合うはず。

「・・・・・・いないの？」
龍の家について、ベルを押しても誰も出てこなかった。
まったく、どれだけすれ違えば気が済むんだ。しかたなく、私はとぼとぼと引き返す。
帰り道に、自分の家に帰る途中の龍に遭遇でもすればいいのだが残

念ながらそれもなく、家に着いた。
案の定、友梨に文句を言われる。それに言い返す気力も何もなく、私は自分の部屋にこもっていた。
もう一度、メールを送ってみるけど、あっけなく跳ね返された。根気よく電話もしてみるけど、１０回中１回も繋がらない。
さすがに学校にまで来ないことはないだろうと、私は携帯を放り出した。
明日、学校で絶対に捕まえるから・・・・・・

第9章

「・・・・・・だから、お前はもうオレンジ頭といればいいじゃん」
龍が面倒くさそうに言う。何回目だろう、この台詞。
「何回言えば分かるかなぁ、あれは無理やりやられただけで・・・・・・・」
「そんなことといって、何の抵抗もしなかったくせに」
「あれは手も足も抑えられててっ」
さっきから似たような言い合いが何分も続いている。
やっぱり、友梨の言うとおりだった。きっと、一晩経つうちに悪い考えが住み着いたんだ。
その時、後ろから聞き覚えのある声がした。
「仲直り、失敗？」
振り向くと、にやけた顔のオレンジ頭がいた。・・・・・・こいつのせいだ。こいつのせいで、全部滅茶苦茶になったんだ。
今度こそ、と足を上げようとしたけど、その前に龍が皮肉たっぷりに言った。
「じゃあ、後は2人でごゆっくり」
そう言って、門の方へと歩いてくる。
「だからっ・・・・・・」
龍を追いかけようとした私の腕を、オレンジ頭が掴む。
「離してって！全部、あんたが悪いんだから・・・・・・」
思いっきり睨みつけると、オレンジ頭がため息をついた。
「もう、諦めたら？」
――――ハ？諦めたら？誰のせいでこんなことになったと思ってんだこいつ。
例によって例のごとし、足が出た。　今度は、誰にも邪魔させない。
思いっきり痛めつけてやる――――と、そいつは汚すぎる手を出してきた。

カチッ
何、この音。
目だけを動かして自分の右を見ると、ライターの火があった。こいつが煙草を吸っているのを見たことがあるから、多分その時に使うんだろう。・・・・・高校生で煙草は、ダメなんだぞ。
「分かるだろ？これ以上動いたら、お前の顔どうなると思う？」
オレンジ頭の言葉で我に返った。そうだ、今はこんな奴の健康状態だの法律がどうとか言っている場合じゃない。　我に返って、もう一度自分の顔の真横にある火を見て、生まれた瞬間以来に出す悲鳴を上げた。
死ぬ、今度こそ死ぬ。今度は助けてくれる人なんていない。
こんな悲鳴なら、もちろん先生の耳にも入ったんだろう、担任から校長から、いろんなところからいろんな先生が駆けつけてきた。
オレンジ頭のライターはすぐに取り上げられて、そいつはそのままどこかに連れて行かれた。
よく自分でもあんな声が出たものだ。きっと、里香たちにあんな目に遭わされたからかな。つくづく声は大切だと再確認した放課後。
とりあえずこれ以上火傷のあとは増やさずに済んだわけだけど、龍とはもう無理なのかな。
オレンジ頭の言うとおり、諦めるしかないのか。
なんでここまで、いろんな人に邪魔されるんだろう。そこまで不釣り合いかな。
そもそも誰が、不釣り合いとか決めた？里香に至っては、本当にそうだ。嫉妬ごときで、自分が選ばれなかったからって・・・・・・
何を考えても、龍は戻ってこない。もう、終わった。
何もかも・・・・・・終わった。

第１０章

「柚・・・・・・っ」
空耳が聞こえた。龍の声だ。龍が戻ってきた・・・・・・空耳が。
「柚！」
空耳って、こんなにハッキリ聞こえるものだっけ。いや、もしかしたら、本当に聞こえるのかも――――――いや、それはない。
そう疑いつつも、振り返ってみた。
「龍・・・・・・？」
さっきとは打って変わったか細い声に、笑いそうになる。でも私は笑うどころではなかった。
本当に、龍がいる。まさか、声だけじゃなくて幻覚までみるようになったか？
試しに、手を伸ばしてみた。龍の制服の裾に触れる。触れた。本物だ。
戻ってきた。龍が、戻ってきてくれた。
「よかった、大丈夫だった。ゴメン、本当にゴメン・・・・・・」
よっぽど急いできたのか、息が荒い。
「あり・・・・・・ありがとう」
声が震えて、泣きそうになってきた。というか、このとき既に泣いていたと思う。
崩れそうになるのをなんとか踏ん張って、龍の顔を見て笑った。
龍はまた、私の目を見て笑ってくれた。

「でもさぁ、なんで戻ってきてくれたの？」
帰り道に聞いてみる。
「お前、あんだけ大きい声あげといてそれはないって」
「そ、そんなに大きかったっけ？あんとき龍、どの辺にいたの」
出来るだけ、あそこから近い場所であることを祈りつつ、私は聞い

た。
「えーっと・・・・・・門出てちょっと進んだところ」
・・・・・・そこまで大きい声だったのか。
「俺だって最初は無視しかけたけど、やっぱり柚の声だと思って戻ってみたらあのザマだよ。でも、よくあそこまでデカイ声でたな」
「それは・・・・・・そう、里香のせいで」
あぁ、と龍はうなずく。
「今回の場合、里香のおかげ、っていうのかな？」
「さぁねー」
２人で、笑い合った。
そのとき、龍が私に軽いキスをしてくる。
お互い顔を見合わせて、また小さく笑う。
これからも、ずっと平和で、一緒に笑えてるような平凡な道を「ふたり」で歩んで行けますように。

fin――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9780m/

ふたり。

2010年10月30日17時42分発行